空母福建の就役

（就役時の習主席の視察報道。出典：CCTV軍事報道20251107）

２０２５．１２．１６

国家基本問題研究所　研究員　中川真紀

（注：衛星画像の使用申請終了したため、11月28日版17ページに画像を追加）

※　本書の無断転載、複写、複製を禁じます。
衛星画像は著作権の関係上Vantor社の画像使用は別途申請が必要、また（禁転載）とある画像は申請不可・転載禁止です。

項　　目

１　空母福建の就役

２　空母福建の性能

３　今後の戦力化の見通し

４　次期空母建造の可能性

中国海軍の編成と空母

空母は北部・南部戦区の基地を母港にするも、運用は中央軍委直轄の可能性

空母福建の就役

時　期	建造以降年数	経　　緯
2018. 11		既に建造開始と報道（上海江南造船所）
2022. 6. 17	3年7か月	進水
2024. 5	5年6か月	第1回海上試験
2025. 9	6年10か月	第9回海上試験・訓練（南シナ海） 発艦映像初公開
2025. 11. 5	7年	就役（南部戦区榆林基地）
2025. 11. 18		就役後、初の海上実動訓練の報道

就役式典の状況

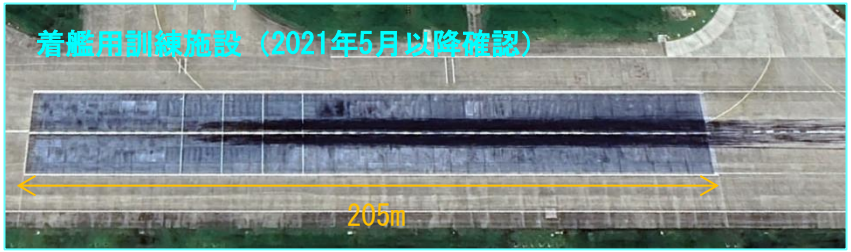
満艦飾の福建（手前）と山東（奥）

習主席から軍旗を授与された福建艦長と政治委員

（出典左右共：中国軍網20251107）

飛行場：陵水（南部戦区）

○ 2025年9月以降福建艦載機確認
○ 2025年3月以降、新築した事務棟・宿舎地区の使用確認



○ 山東・福建の配備に併せ逐次拡張
○ 但し、格納庫は2コ空母編隊分には不足で福建艦載機全配備は未完。現在、北部戦区飛行場でパイロット育成中の可能性

中国空母の比較

	遼寧（旧ﾞｧﾘｬｰｸﾞ）	山東（国産1番艦）	福建（国産2番艦）
写　真			
就　役	2012年9月	2019年12月	2025年11月
満載排水量　(t)	59,439	67,000	80,000
全長　(m)	304.5	315.5	316
幅　水線/最大(m)	37/70	38/75.5	40/76
主機	ﾎﾞｲﾗｰ＋蒸気ﾀｰﾋﾞﾝ		
出力　（馬力）	20万	20万	22万
速力　（ﾉｯﾄ）	30		
発艦装置	スキージャンプ		電磁カタパルト
ｴﾚﾍﾞｰﾀｰ　（基）	2		
標準艦載機（機）	24（＋ヘリ×12）	36（戦闘機のみ機数）	40（戦闘機のみ機数）

（資料源：世界の艦船2025年10月号増刊）

空母福建艦載機

9月22日、電磁カタパルトを使用、3機種の発艦訓練の映像を初公開（出典：中国軍網20250923）

・J-15よりアビオニスク、武器システムを強化
・強力な対艦対地攻撃能力を有する重型艦載機
・ｶﾀﾊﾟﾙﾄ・ｽｷｰｼﾞｬﾝﾌﾟ両方に対応

・空母編隊での制空権奪取を主任務とする中型艦載機
・ステルス機能により、敵の防空網を突破

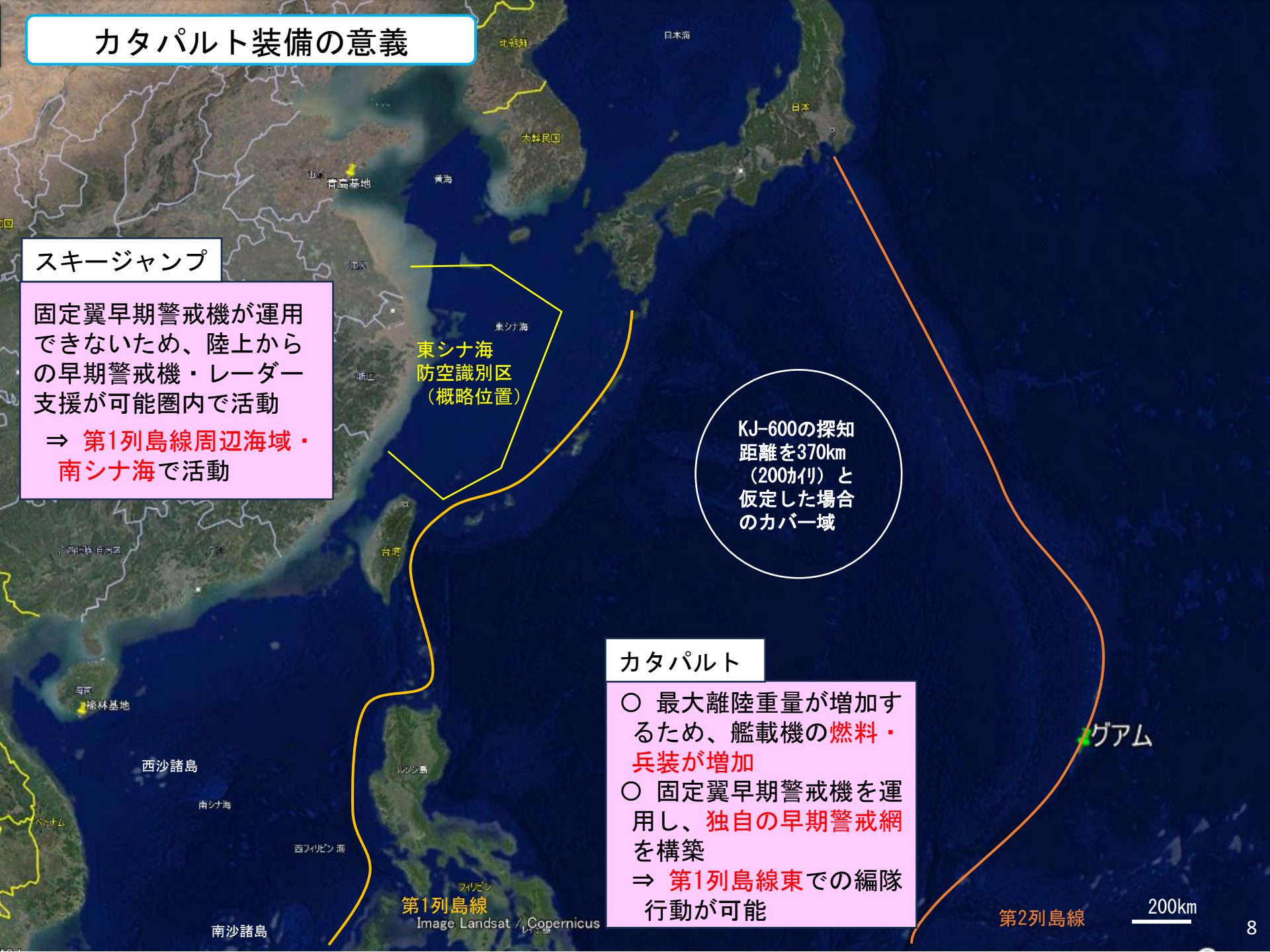
・警戒探知・指揮誘導・目標指示・作戦調整等を実施
・固定翼機により監視や作戦統制範囲が拡大かつ持続し空母編隊の作戦能力が向上

その他の艦載機

前方で電子戦を実施し、友軍機を支援

最新の対潜哨戒ヘリ。探知・攻撃能力が向上

カタパルト装備の意義



スキージャンプ

固定翼早期警戒機が運用できないため、陸上からの早期警戒機・レーダー支援が可能圏内で活動

⇒ 第1列島線周辺海域・南シナ海で活動

KJ-600の探知距離を370km（200ｶｲﾘ）と仮定した場合のカバー域

カタパルト

○ 最大離陸重量が増加するため、艦載機の燃料・兵装が増加

○ 固定翼早期警戒機を運用し、独自の早期警戒網を構築

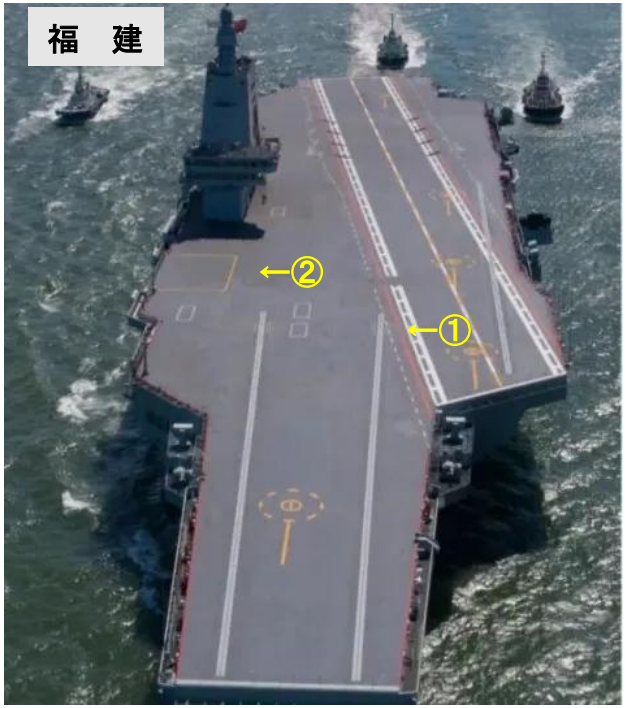
⇒ 第1列島線東での編隊行動が可能

米中空母の比較

	ニミッツ級	フォード級	福建（国産2番艦）
写　真			
満載排水量　(t)	91，400-102，000	101，605	80,000
全長　(m)	332.0	332.8	316
幅　水線/最大(m)	40.8/76.8	41.8/78	40/76
主機	原子炉＋蒸気ﾀｰﾋﾞﾝ		ﾎﾞｲﾗｰ＋蒸気ﾀｰﾋﾞﾝ
出力　（馬力）	28万		22万
速力　（ﾉｯﾄ）	30		30
発艦装置	蒸気カタパルト×4	電磁カタパルト×4	電磁カタパルト×3
ｴﾚﾍﾞｰﾀｰ　（基）	4	3	2
標準艦載機（機）	常時70/最大90	常時70/最大90	40（戦闘機のみ機数）

（資料源：世界の艦船2025年10月号増刊・Naval Technology）

米中空母の船体比較



米空母と比較すると、カタパルト長は約110mでほぼ同じだが、

① 発射カタパルトと着艦甲板のラインが近く、同時発着艦の必要があれば制限
② エレベーターが発射カタパルトに近く、発艦時に使用不可
③ 原子力でないため、発艦に必要な電力の安定的供給に不安

ｶﾀﾊﾟﾙﾄやｴﾚﾍﾞｰﾀｰ数・排水量等との単純比較では、米空母の約6～7割の発艦能力

⇒ ○ 福建は国産1番艦「山東」の船体を基本に、電磁カタパルト装備を優先
○ 当初は「遼寧」と同様に電磁カタパルト試験・練習艦として運用

米中空母の出撃能力比較

※防衛省は2025年4月までは訓練間の戦闘機発着艦総数を、6月以降は戦闘機とヘリを合わせた1日当たりの発着艦数を公表しており、1日当たりの推定発着艦数を4月以前は総数を訓練日数で割り、6月以降はこれまでの実績から戦闘機の割合の最大値、6割として計算

スキージャンプ式空母の訓練時発着艦実績

	時期	日数	戦闘機 発着艦総回数	戦闘機+ヘリ 発着艦回数/日	戦闘機 推定発着艦回数/日※
遼寧	2024.9.20-26	7	250		36
	2025.6.9	1		90	54
	2025.6.14	1		90	54
山東	2024.7.9-15	7	240		34
	2024.7.17-18	2	20		10
	2025.4.1-2	2	40		20
	2025.4.23-25	3	70		23
	2025.6.10	1		50	30
	2025.6.19	1		50	30

（資料源：推定発着艦数以外、防衛省統合幕僚監部）

中国軍事専門家は福建の能力を以下のように評価（張軍社　環球時報20251108）

○ 艦載機が燃料・弾薬をフル装備で離陸可能

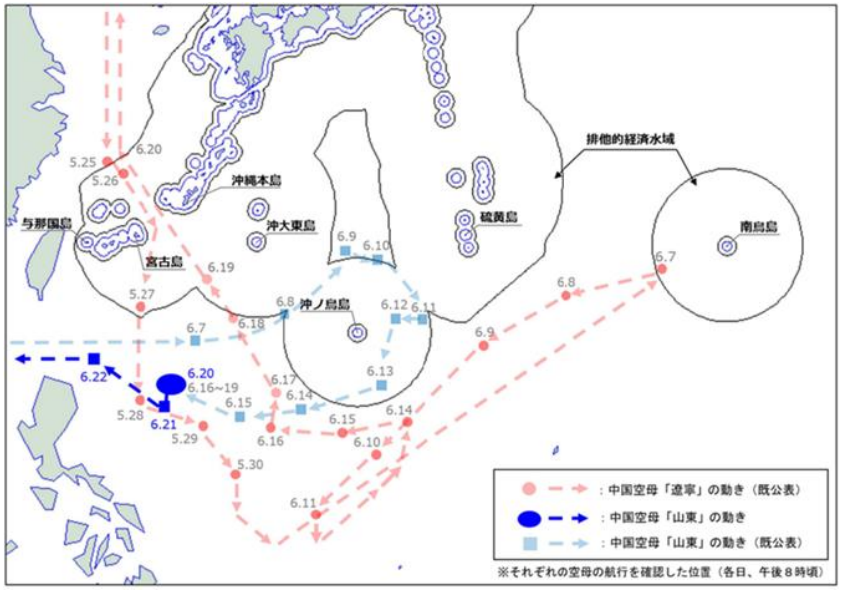
○ J-15T×1が90秒で発艦でき、1日当たり出撃は270～300回が可能

○ 福建はスキージャンプ式より発艦効率は良いものの、米軍でも電磁カタパルトは不具合が頻発しており、現時点の出撃能力は未知数

○ 米フォード級は訓練時160回/日、作戦時270/日の出撃可能と報道されており、米空母訓練時の6～7割、100回/日程度を目指して訓練する可能性

中国空母編隊の構成

6月西太平洋での対抗訓練（出典：統合幕僚監部）



対抗訓練時の空母編隊構成

打撃群		遼寧	山東
空母		1	1
ﾐｻｲﾙ駆逐艦	ﾚﾝﾊｲ級	3	2
	ﾙｰﾔﾝⅢ級	2	1
ｼﾞｬﾝｶｲⅡ級ﾌﾘｹﾞｰﾄ		2	2
ﾌﾁ級補給艦		1	0
ﾌｭ級高速戦闘支援艦		1	1
計		10	7

西太平洋での対抗訓練の状況を取り上げた中国ﾌﾟﾛﾓｰｼｮﾝﾋﾞﾃﾞｵ、潜水艦も放映

（出典左右共：人民日报客户端20250804）

○ 随伴艦の訓練は既に実施。ﾚﾝﾊｲ級を旗艦、潜水艦を含めた空母打撃群を構成
○ 艦載機もスキージャンプ式であれば不測事態発生時に陸飛行場に着陸できない
遠海で外国機に対しスクランブル出来るほどに練度向上、但し増員分は育成中

国産空母就役後の戦力化タイムスパン

（資料源：中国青年網20230310，央視新聞20250524「重要战略威慑力量 山东舰刷新我国航母事业多个“首次”」等）

年月	山東就役後の活動状況	就役以降年数
2019.12	就役	
2020.5	初の航行訓練	5か月
2020.12	台湾海峡通過し機動訓練	1年
2021.5	南シナ海で訓練	1年5か月
2022.8	組織的な武器使用訓練	2年8か月
2023.3	2022年に試験を経て、既定の作戦能力目標達成し戦備訓練へ移行可能と報道 整備・訓練サイクル完成済	3年3か月
2023.4	バシー海峡通過し、初の西太平洋進出 聯合利剣参加	3年4か月
2024.10	南シナ海で遼寧と初の2コ空母編隊協同訓練	4年1か月
2025.5-6	西太平洋で空母対抗演習	5年5か月

海軍報道官（20251108）
「福建は就役後も試験を継続し、システムの安定性を検証すると共に、艦載機種の配分検討や編隊訓練等を計画的に実施する予定」

○ 福建も当初南シナ海で各種試験を継続、合格後に西太平洋進出、他部隊との訓練実施と段階的に戦力化するであろうが、電磁カタパルトの運用性能が時間を左右

○ カタパルトに問題が発生しなければ、山東の経験を基に戦力化のスピードを上げ建軍百年の2027年中には無理をしてでも太平洋進出することも否定できず

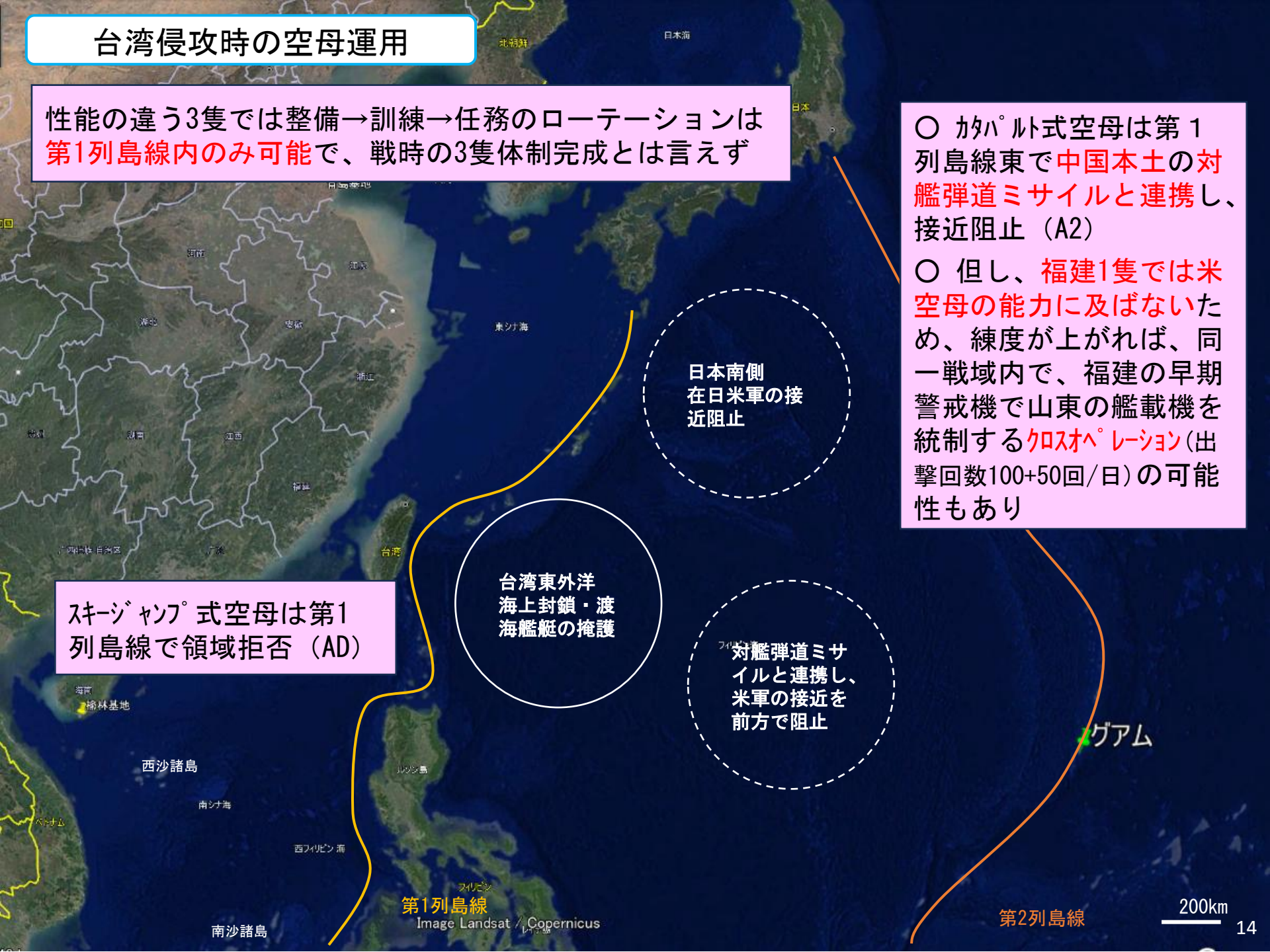
台湾侵攻時の空母運用

性能の違う3隻では整備→訓練→任務のローテーションは第1列島線内のみ可能で、戦時の3隻体制完成とは言えず

○ ｶﾀﾊﾟﾙﾄ式空母は第１列島線東で中国本土の対艦弾道ミサイルと連携し、接近阻止（A2）

○ 但し、福建1隻では米空母の能力に及ばないため、練度が上がれば、同一戦域内で、福建の早期警戒機で山東の艦載機を統制するｸﾛｽｵﾍﾟﾚｰｼｮﾝ(出撃回数100+50回/日)の可能性もあり

ｽｷｰｼﾞｬﾝﾌﾟ式空母は第1列島線で領域拒否（AD）



平時の太平洋における空母運用

福建戦力化以降は、3隻ローテーションにより、西太平洋に1隻が常時展開も可能

⇒　○ 太平洋でのプレゼンスを発揮し、日本を牽制・台湾を威嚇

○ 日米部隊の監視や、潜水艦等艦艇の情報収集を強化し、有事の際に必要なデータ蓄積を加速

中国船舶集団第701研究所（武漢）の模擬空母

山東起工2013年

↓

福建起工2018年

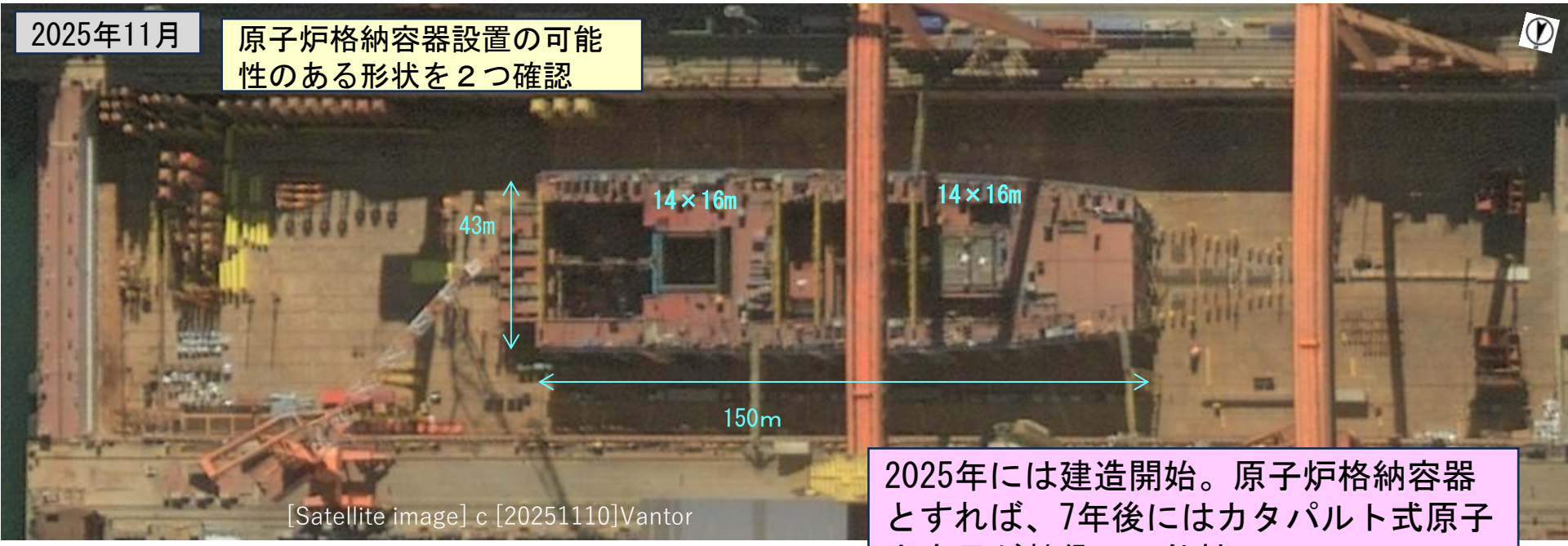
↓

2024年7月以降工事確認、2025年4月までに船体幅を拡張しアイランドを後方配置したものに変更

○ 2024年には次期空母の設計決定の可能性

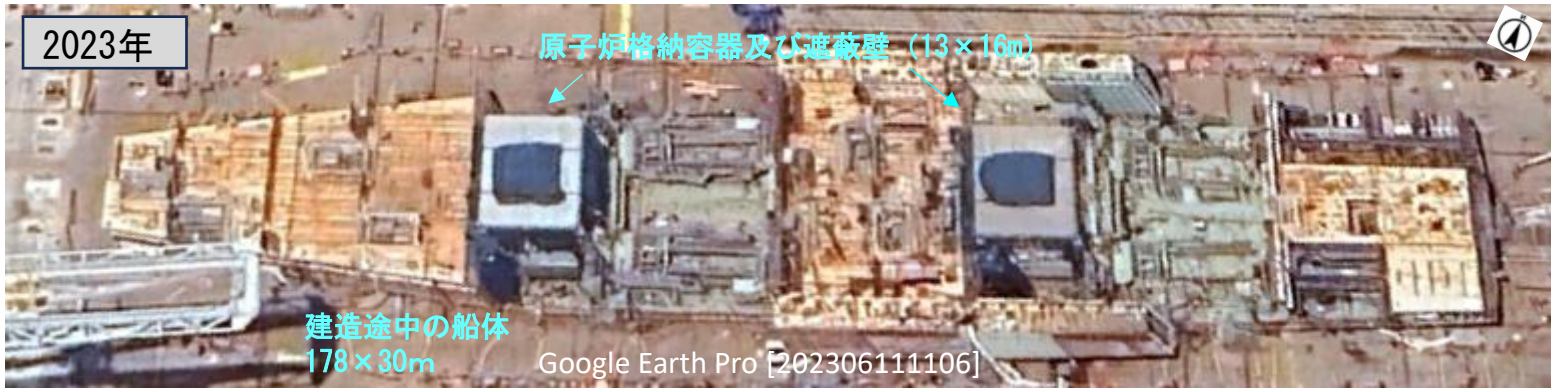
○ 次期空母は船体設計を変更、カタパルト配置・原子炉積載等を検討し、米空母と同等の機能を目指す可能性

大連造船所・「山東」建造ドッグでの新たな大型船舶の建造



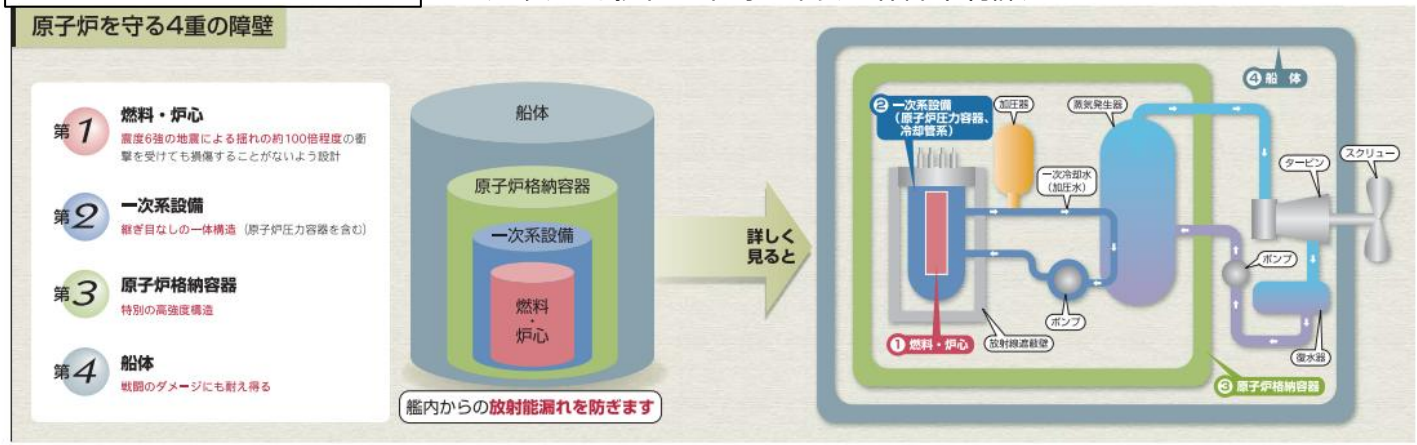
2025年には建造開始。原子炉格納容器とすれば、7年後にはカタパルト式原子力空母が就役の可能性

【参考】米・ニューポート・ニューズ造船所の原子力空母建造



米空母原子炉の仕組み

（出典：外務省北米局日米安全保障条約課）



中国海軍戦略と空母

時期	戦略	白書等の記述	海軍関連事象	空母等整備
1949～1970年代	沿岸防御		1949　海軍創設 1974　西沙群島海戦	
1980年代～2014年	近海防御	1986　劉華清、近海防御戦略を発表 2006白書：近海防御の戦略縦深を逐次増大 2008・10白書：近海防御戦略下で非伝統的安保脅威に対応する遠海協力能力の発展 2013白書：近海防御戦略下で非伝統的安保脅威に対応する遠海機動・遠海協力能力の発展	1982　劉華清海軍司令官就任 1988　南沙群島海戦 2008　アデン湾海賊対処派遣 2012　習中央軍委主席就任 海洋強国建設戦略目標 2013　一帯一路（海上ｼﾙｸﾛｰﾄﾞ）提唱	1980年代後半　空母建造計画策定 1998　ﾜﾞｧﾘｬｰｸﾞ購入 2005　遼寧改修開始 2012　遼寧就役 2013　山東建造開始
2015年～	近海防御・遠海護衛	2015白書：近海防御・遠海護衛（国家主権と海洋権益の擁護・シーレーンと海外利益の防護）	2017　駐ジブチ保障基地開設	2018　福建建造開始 2019　山東就役 2020　ﾚﾝﾊｲ級1番艦就役 2025.5　遼寧・山東西太平洋対抗演習 2025.11　福建就役
	近海防御・遠海防衛	2019白書：近海防御・遠海防衛（遠海防衛型への転換を加速）	約40年かけてカタパルト式空母就役	

○ 福建により遠海防衛戦略への転換を開始も、対応可能な空母は1隻のみ

○ 2035年「国防と軍隊の近代化の基本的実現」：少なくとも 原子力空母×１
2049年「世界一流軍隊の全面的完成」：原子力空母×３でﾛｰﾃｰｼｮﾝ完成を企図

○ 福建就役は平時の太平洋でのプレゼンス拡大を可能にし、かつ遠海防衛戦略に向けての第１歩。日本も長期的戦略をもって対応する必要あり